

横浜市小学校社会科研究会

学年部会

研修会記録

第 2 号

令和5年 7月 21日
横浜市小学校教育研究会
会長 濱田 哲也
横浜市小学校社会科研究会
会長 加藤 和之
同 学年部長 宮原 美由紀

【提案日時】

令和5年7月5日（水）

提案 渡邊 亮太 先生（別所小）

【会 場】

平沼小学校

司会 益満 順也 先生（羽沢小）

記録 三原 功士郎先生（間門小）

【提案】

単元名「りんごから考える寒い地域の人々の暮らし」

問い「りんごの生産
場所が限られている
のはなぜか」

りんごの生育に必要な自然条件

青森県の気候・地形
の特徴

【提案者より】

普段の生活でよく目にするりんごを取り上げ、りんご生産がさかんな青森県の人々が寒い地域の自然条件を生かしながら生活を送っていることについて学びを深めていく単元

視点①子どもが必要感を持ちながら学習するためのカリキュラムデザイン

○成果

- ・りんごという身近な材から問いを生み出していく。
- ・「どうして生産する場所が限られているのか」という問いから、りんごの生育に必要な自然条件（＝冷涼な気候、少ない降水量、昼夜の気温差）を考えるを通して、寒い地域の特徴を理解するねらい。

・青森県という具体的な地域を取り上げることで、「鹿児島県奄美と比べると青森県の方が・・・」というように具体的に資料を読み取る姿が見られた。

△課題：国土と気候の知識がない状態で行う学習の難しさがあった。

視点②個人学習と集団学習の時間の確保

○成果：調べる時間を十分確保することで、「言い足りなかった」という程に子どもの発言の機会が増え、発言や振り返りに自分の意見を出せるようになった。

△課題：子ども自身の力のみで学習を調整することは難しかった。教師の準備や構想は不可欠。

【グループ協議】3つのグループに分かれて、グループ協議を行う。

協議内容

- ① 「国土と気候」と「特色を生かした人々の生活」の単元を同時に学習してもよいか。
- ② 社会的事象の意味等に迫るためには、どのような教師の出があるとよかったか。

① 深い学びに必要な前提知識

- ・気候や地形の特色など、前提知識がない中で本単元の学習問題に迫るのは難しい。
⇒雨温図や降水量の読み取りを学習後なら、本単元における子どもの思考がより深まったのではないか。
- ・りんごの生育に必要な条件と、地形との関わりを、子どもがどれだけ理解していたのか疑問。

② 社会的事象の意味等に迫るための教師の出

- ・「りんごしかない」という農家の話を中心に学習問題を設定しても良かったのでは？
- ・品種改良に注目している子どもに対して、教師による支援や修正が必要だったのでは？

【担当校長先生より】

瀬谷さくら小学校 場家 誠校長先生

<学習で使う言葉について>

- ・学習を「深める・たしかめる」や、学習問題を「設定する・立てる」など、学習における言葉の使い方が曖昧だった。学習で使う言葉は明確な意図を持って使っていく必要がある。

<学習問題について>

- ・本気の学習問題「青森県でりんごがとれている」では、人の営みには迫れない。
- ・「生産がさかんか・さかんでないか」など、人の営みに焦点を当てて問題を設定すべき。
⇒そうすることで、「りんごしかない」と話した農家の生活や苦勞、努力に迫っていけるのではないか。

平沼小学校 寺岡 徹校長先生

<学習問題について>

- ・人々の工夫に迫る学習問題を設定すべき。⇒例：生産時期をずらす工夫など。

<単元の組み合わせについて>

- ・指導内容を複数もつことは、できなくはないが難しい。

<子どもの学習調整について>

- ・子どもの学習調整は、学習のゴールが見えていないと難しい。学習の見通しを子どもが明確に持って学習を進められるよう、教師が支援する必要がある。
⇒その際、どのように学習問題を設定するかが重要

<学習内容について>

- ・青森県の地形とりんご生産はどのように関係しているか？
- ・青森県で最も生産量が多い作物は米
- ・「青森県では平らな地形を生かしてりんごを生産している」と考える子どもがいたが、りんごの生産は主にゆるやかな斜面地で行われており、平地は基本的に米の生産に使われている。
⇒このことは全体で確認しておく必要がある。
⇒この関係を理解していると、より深い学びにつながるのではないか。

文責 三原 功士郎 (間門小学校)
発 杉内 翔太 (川和小学校)